

はじめに

私は、愛媛県の西南部旧西宇和郡三瓶町で生まれました。その頃は秋になると麻のドンゴロスに詰めた米が縁側にうず高く積まれ、学校へ向かう時は家の前の庭いっぱいにひかれた筵の上で乾燥させている糀米を踏まないよう、筵の端を器用に渡り歩いたものです。

米の収穫が終わると「秋祭り」が始まります。太鼓の音が響く中、大名行列の後にお御輿様が3つ、四つ太鼓の後に、大太鼓を乗せたリヤカー、稚児の舞、浦安の舞の少女達が続き御旅所を目指します。私は長女でしたので、憧れだった稚児の舞も浦安の舞も両方舞いました。お祭りの日は、朝から一族の女子衆(おなごし)が土間の竈(くど)で煮炊きをし、その後「おきやく」をしている座敷に向かって牛鬼が庭先から首を突っ込み、唐獅子や五つ鹿が庭で舞います。そして夜の熱気あふれるお御輿様の宮入りが終わったら、次の日はお楽しみの「お神楽」です。私は、大蕃の舞や、ヤマタノオロチの出し物が大好きで最後までかぶりつきで見ているような子どもでした。

季節は少しさかのぼりますが、盆行事も心に残っています。8月13日の盆の入りには、座敷に高さ1メートル30センチほど、広さは畳一畳分の「オショロダナ」を建て、両側に蓮の葉などを飾り、位牌を仏壇から全部出してご先祖様をお迎えします。我が家ではお靈供はお盆の三日間毎食レシピが変わります。15日の夕刻には、お靈供の残りやお供え物などを新聞紙にくるみ、浜辺に藁で作られる「オショロブネ」に乗せて先祖を彼岸へとお送りし、その夜は、「盆踊り」が行われます。盆踊りは、一か月ほど前から大人たちが子供たちにみっちり教えるのですが、子供たちにとっては青年団が世話をするジュースやかき氷のふるまいも楽しみのひとつでした。

このような故郷の伝統文化の経験は、身体に刻み込まれたDNAのように今でも私の「心の礎」となっています。子どもは大人や年長者の伝統文化のふるまいに憧れ、まね、そして歳満つると参加して、地域活動として関わっていきます。伝統文化の継承とは、子どもが地域の中で大人として認められていく過程なのです。そして大人になって、生まれた地域を離れても、幼いころから育まれた伝統文化のDNAは身体のどこかにしっかりと受け継がれているはずです。今、都会で暮らしている若者も、いつかは生まれ育った地域の伝統文化とそれに携わっていた大人たちの背中を思い出し、故郷への回帰を考えていただければ嬉しいです。

今号は「伝統文化と地域とのかかわり」をテーマとし、県内外における様々な伝統文化の継承活動に携わっている方々に寄稿頂きましたが、中には人口減少・高齢化により、活動を担う若手層や子どもたちが減少し、地域外の方、いわゆる関係人口に伝統文化の継承を委ねざるを得ないケースもあります。

皆さんは地域の伝統文化をこれからどのように次の世代に、地域に、伝承していくべきだと思いますか?今号と共に考えていただければ幸いです。

(副センター長 山下 みさと)

